

1997年6月に「サッカーの暑さ対策ガイドブック」を配布し注意喚起を行ってきたが、十分な対策が講じられていない競技会運営が散見されることや、年々夏季の暑さが厳しくなっている昨今の状況を考慮し、さらに進んだ熱中症対策<ガイドライン>を策定した。

選手たちが安心して安全にプレーできる環境を整えるべく、様々な立場において本対策の趣旨を理解の上、従来の対策に加えて本ガイドラインを遵守していただきたい。

また、本ガイドライン以外の、熱中症についてや選手の体調管理、暑熱馴化の方法等の基本的な考え方についてあらためてご確認し、熱中症が選手の生命にかかわることを十分に認識した上で大会・試合の運営やチームの指揮・監督、指導に携わること。

【対象試合】 国内で開催される、国際試合を除く、サッカー、フットサル、ビーチサッカーの全ての試合。

【大会/試合スケジュールの規制(事前の準備)】		企画段階での準備を規定	対応
	大会/試合を開催しようとする期間の各会場(都市)における、過去5年間の時間毎のWBGTの平均値を算出し、その数値によって大会/試合スケジュールを設定する。必要に応じて、試合時間を調整して早朝や夜間に試合を行う、ピッチ数を増やす、大会期間を長くするなどの対策を講じる。 ※過去のWBGT値は環境省『熱中症予防情報サイト http://www.wbgt.env.go.jp/record_data.php 』からダウンロードできる。	大会／試合企画時点で準備を行う必要があり、急な練習試合当を行う場合に対応が可能か？ FAQ参照	
【規制基準】(事前準備)			
■	WBGT=31℃以上となる時刻に、試合を始めない。(キックオフ時刻を設定しない。)	大会日程に余裕を持って調整の可能にするという意味か？	7～9月の大会／試合を計画する段階で、過去のデータを把握して事前準備を行うこと。 「屋根のない人工芝」については、避難所を設置し、十分な休憩スペースが確保されていること。
■	WBGT=31℃以上となる時刻が試合時間に含まれる場合は、事前に『JFA 熱中症対策※1<A>+』を講じた上で、試合日の前日と翌日に試合を行わないスケジュールを組む。	4種の場合、1日2試合以内としているが、連日では行わないという意味か？ FAQ2-⑦	
■	WBGT=28℃以上となる時刻が試合時間に含まれる場合は、事前に『JFA 熱中症対策※1<A>』を講じる。		
▽	クーラーが無い体育館等の屋内で試合を行う場合も、上記と同じ基準で対策を講じる。		
▽	屋根の無い人工芝ピッチで試合を行う場合は、天然芝等に比べてWBGT 値の上昇が見込まれるため、上記の値から-3℃した値を基準とする。	「屋根のない」とは、全面を屋根で覆われていないという意味か？	
*	WBGT=28℃以上となる時刻は、屋根の無い人工芝ピッチは原則として使用しないとする『JFA熱中症対策※1<A>+』を講じなければならないため、使用不可とする。	「-3℃」とは、WBGT=25℃という意味か？	
*	WBGT=25℃以上となる時刻が試合時間に含まれる場合は事前に『JFA 熱中症対策※1<A>』を講じる。		
『JFA 熱中症対策』 ※1			
<A>			
①	ベンチを含む十分なスペースにテント等を設置し、日射を遮る。 ※全選手/スタッフが同時に入り、かつ氷や飲料等を置けるスペース。 ※スタジアム等に備え付けの屋根が透明のベンチは、日射を遮れず風通しも悪いため使用不可。	試合会場において十分なテント設備を設けることが出来ない場合(日差しの変化によりテントが十分に日差しをさえぎらない場合なども含む)、どのような措置が考えられるか？	計画時点で⑤を除く状況把握を行うと共に、準備を十分に行うこと。テント設置については、強風等の対策についても考慮すること。 ⑤について、周辺等に環境がない場合には事前に周知すること。
②	ベンチ内でスポーツドリンクが飲める環境を整える。 ※天然芝等の上でも、養生やバケツの設置等の対策を講じてスタジアム管理者の了解を得る。		
③	各会場にWBGT 計を備える。		
④	審判員や運営スタッフ用、緊急対応用に、氷・スポーツドリンク・経口補水液を十分に準備する。		
⑤	観戦者のために、飲料を購入できる環境(売店や自販機)を整える。	4種の場合も感染者に対する配慮が必要か？	
⑥	熱中症対応が可能な救急病院を準備する。特に夜間は宿直医による対応の可否を確認する。	救急病院の確認でよいか？	
⑦	[Cooling Break※2]または飲水タイムの準備をする。		
			
⑧	屋根の無い人工芝ピッチは原則として使用しない。		⑨は、⑥で救急医の把握を行い、対応ができる体制を整えること。 ⑩日影の確保
⑨	会場に医師、看護師、BLS(一次救命処置)資格保持者のいずれかを常駐させる。	4種大会では、規模のより確保が困難な場合がある。	
⑩	クーラーがあるロッカールーム、医務室が設備された施設で試合を行う。	4種大会では、規模のより確保が困難な場合がある。	
【大会/試合実施時の規制(当日の対応)】		当日での対応を規定	
●	各会場にWBGT計を準備し、計測した数値により対策を講じる。		
[計測方法]			
①	必ずピッチ上で、WBGT計の黒球が日影にならないように計測する。計測時のWBGT計の高さは、プレーする選手の年齢の平均身長 ² /3とする。 (例.中3男子の場合、168.8cm×2/3=113cm)		
②	計測する時間はできる限り試合開始の直前、かつロッカーアウトするまでに両チームに対応方法を伝達できるタイミングとする。		
③	試合中もピッチに近い場所で計測し続け、数値を把握する。	「ピッチに近い場所」とは？	
④	ハーフタイム時(できる限り後半開始の直前)の数値により後半の対応方法を決定し、両チームに伝達する。		
	※原則として、前後半のプレー中に数値が変わっても対応方法の変更はしない。		

【規制基準】当日			
■	WBGT=31℃以上	の場合は、試合を中止または延期する。	※試合前、ハーフタイム時に中止や延期とした場合の対策や当該試合の取扱いについて予め規定しておくこと。 * 大会日程中での調整 * 延期の場合の措置 * 中止の場合の措置 ①再試合、②中止時点からの再試合、③中止時点での試合成立など * 会場使用の対応
	やむを得ず行う場合は『JFA熱中症対策※1<A+B>』を講じた上で、[Cooling Break※2]を行う。		
	※中止や延期の判断は、試合前またはハーフタイム時に行うこととし、前後半のプレー中に試合を中止・延期はしない。試合前は大会の主催者または主管者、もしくはその代行者が必要に応じて主審と協議の上で判断し、ハーフタイム時は主審が大会の主催者または主管者、もしくはその代行者と協議の上で判断する。		
	※大会主催者は、中止や延期となった場合の対策や当該試合の取扱いについて予め規定しておくこと。		
■	WBGT=28℃以上	の場合は、『JFA熱中症対策※1<A>』を講じた上で、以下の対応を行う。	
	1・2種…[Cooling Break※2] または[飲水タイム]を行う。		
	3・4種…[Cooling Break※2]を行う。		
	また、『JFA熱中症対策※1<A+B>』を講じた場合は、全ての種別において[Cooling Break※2] または[飲水タイム]を推奨することとする。		
■	WBGT=25℃以上	の場合は、3・4種の試合は『JFA熱中症対策※1<A>』を講じた上で、以下の対応を行う。	
	3種…[飲水タイム]を行う。		
	4種…[Cooling Break※2] または[飲水タイム]を行う。		
▽	体育館等の屋内でフットサル等の試合を行う場合も、上記と同じガイドラインを適用する。ただし、同じWBGT値でも屋外に比べて熱射・輻射が少ないが高湿度傾向にあるので、除湿機の設置や風通しを良くするなどの対策を講じる必要がある。また、建物自体に熱がこもるため日没後もWBGT値が下がりにくい傾向があることに注意すること。		
▽	フットサルやビーチサッカー、8人制サッカーのような「自由な交代」が可能な試合についても、ガイドラインに沿って[Cooling Break]や[飲水タイム]を設定する。		
[Cooling Break] ※2			
	前後半1回ずつ、それぞれの半分の時間が経過した頃に3分間の[Cooling Break]を設定し、選手と審判員は以下の行動をとる。		
①	日影にあるベンチに入り、休む。		
②	氷・アイスパック等でカラダ(頸部・脇下・鼠径部)を冷やし、必要に応じて着替えをする。		
③	水だけでなくスポーツドリンク等を飲む。		
留意点>			
	・原則として試合の流れの中で両チームに有利・不利が生じないようなアウトオブプレーの時に、主審が判断して設定する。		
	・戦術的な指示も許容する。		
	・チームが、カラダを冷やすための器具を持ち込む際は、事前に大会運営責任者の了解を得る。		
	・審判員は[Cooling Break]の時間を遵守するため、試合再開時には選手に速やかにポジションに戻るよう促すと同時に、出場選手の確認を行う。		
	・サブメンバーは出場メンバーとの識別のため必ずビブスを着用する。運営担当者は試合再開時に出場メンバーの確認について審判員をサポートする。		
	・[Cooling Break]に要した時間は「その他の理由」によって費やされた時間として前後半それぞれの 時間に追加される。		
	・[Cooling Break]を設定する場合は試合前またはハーフタイム時のロッカールームまでに両チームに伝達する。また、WBGT値に応じて、前半と後半の対応が異なる場合がある。		
(参考… 飲水タイム)			
	・前後半それぞれの半分の時間を経過した頃、試合の流れの中で両チームに有利、不利が生じないようなボールがアウトオブプレーの時に、主審が選手に指示を出して全員に飲水をさせる。もっとも良いのは中盤でのスローインの時であるが、負傷者のための担架を入れた時や、ゴールキックの時も可能である。		
	・選手はあらかじめラインの外に置かれているボトルをとるか、それぞれのチームベンチの前でベンチのチーム関係者から容器を受け取って、ライン上で飲水する。		
	・主審、副審もこの時に飲水して良い。そのために第4の審判員席と、第2副審用として反対側のタッチライン沿いにボトルを用意する必要がある。		
	・スポーツドリンク等、水以外の飲料の補給については、飲料がこぼれて、その含有物によっては競技場の施設を汚したり、芝生を傷めたりする恐れもある。大会主催者が水以外の持ち込み可否及び摂取可能エリアについて、使用会場に確認をとって運用を決定するので、その指示に従って、飲水する。		
	・飲水タイムは30秒から1分間程度とし、主審は選手にポジションにつくよう指示してなるべく早く試合を再開する。飲水に要した時間は、「その他の理由」により空費された時間として、前、後半それぞれに時間を追加する。		
	・時間の経過にともなって環境条件がかなり変わった場合は、飲水を実施するかしないかの判断をハーフタイムに変更してよい。		
	・飲水を行う場合は、試合前(あるいはハーフタイム時)に両チームにその旨を知らせる。		
	・飲水タイムは、あくまでも飲水のためである。		
	・飲水タイムとは別に、従来どおり、ボールがアウトオブプレーのときにライン上で飲水できる。		